

薬師如来頭部（銅造仏頭）

国宝

685年につくられた、珍しい銅の合金を使った像で、医学と癒しを司る仏陀である薬師如来の頭部である。この像は本来は、奈良市から南に約20kmの飛鳥にある山田寺に収められていたもので、5世紀にわたってこの寺の講堂の本尊として崇められていた。

1180年に平重衡（1158～1185年）が率いる平氏の軍団が興福寺を破壊したのち、興福寺の僧たちがこの仏像を山田寺から移し、再建された東金堂に設置した。

この像は東金堂の本尊として2世紀以上にわたって崇められていたが、1411年の火災で焼失した。火事の炎で銅製の像は溶け落ちた際に、頭部が落下して、左側が破損した。頭部は回収され、1415年、失われた像のかわりに設置された現在の本尊の台座の中に収められた。その存在は忘れられていたが、建物が1937年に補修されたときに再発見された。頭部と一緒に収められていた木の板には、1411年の火災の経緯が記されていたため、研究者たちはこの頭部の由来を知ることができた。

現存している白鳳時代（645～710年）の仏像のほとんどが、小さなサイズのものであり、様式をもとにしてその年代を特定しているにすぎないので、制作年代がはっきりとしている大型の仏像の再発見は非常に重要であった。歴史的な重要性和芸術的な価値の高さから、この頭部は、仏像の断片が国宝に指定された数少ない例のひとつである。